

「アジア SEND 派遣参加報告書」

京都大学農学研究科博士 3 回 飯田 悠哉

フィリピンの周辺地域から日本の農村部へ技能実習というかたちで出稼ぎ季節労働にやってくる農民層の若年男性たちを研究対象としているため、以前から母国における彼らの社会的地位を把握することや、フィリピンの社会科学研究者、大学院生から見た移住労働への認識を知ること、かれらと議論を交わすことを期待していた。今回、アジア SEND 派遣でフィリピン大学ディリマン校アジア文化センターに受入れをお願いするにあたって、SEND 派遣の意義である現地大学院生への日本社会・文化の紹介という任務はもとより、院生や若手研究者との交流、英語およびフィリピン語やヒリガイノン語の習得、受入教員の指導の元での現地フィールド調査を渡航目的として設定した。現地では受入教員であるアジア文化センターの Yoneno-Reynes 先生に様々なご協力をいただき、結果として非常に充実した成果を得られたと考えている。

受入先であったフィリピン大学ディリマン校アジア文化センターは、研究と大学院教育を行う学内の独立した部局であり、フィリピン研究、アジア研究を主要な領域としている。建物は真新しく、図書館も充実しており、研究・大学院教育の環境としては申し分なく思えた。ただし、大学院生の部屋などではなく、毎回のゼミに集まる以外は日常的に顔を会わす訳ではないところがこちらの大学と大きく異なる。そもそも、修士・博士課程に在籍する大学院生は企業等で働いている社会人が多く、日中は働きに出ているため、日々かれらと机を隣にする機会はなかった。また就業時間を考慮して、毎週のゼミは午後 5 時以降にはじまり、終了は 9 時近く、という時間帯に設定されていた。そうしたなかではあったが、ゼミの内容自体はかなりインテンシブであったように思う。派遣者は日本研究のゼミナールに参加することになったが、正規の院生は 3 週に一度は報告が巡ってきていた。内容は各人の研究進捗よりもむしろ、課題として設定された学術論文の読込みとディスカッションということが多く、経験的な調査内容よりも理論的設定に議論の重心があったように思う。派遣者の研究領域である日本の農村問題や移住労働問題に関する論文も課題とされていたため、コメントを求められるなかで日本社会の紹介という任務の一部を果たすことができた。また、ゼミのなかで自分のために時間をもらって報告をする機会を 3 度ほど得たが、以下はアジア文化センター内外からの参加得て、セミナーという形で報告を行った。

Yuya IIDA, "Actual Labor Conditions of Migrant Farm Workers on Lettuce Fields in a Multinational Village", Seminar of Japanese Studies, Asian Cultural Center, University of the Philippines Diliman, Quezon City, Philippines. February 24th, 2015.

フィリピン人農民・労働者を対象とする自らの研究報告に関する、現地研究者や大学院生のコメントは非常に有意義であったし、また報告後にアジア文化センター紀要への投稿も促されたため、研究を完成させて投稿論文に結実させたいと考えるようになった。

このほか、ゼミのない日を利用して、Yoneno-Reynes 先生の指導のもと、ヒアリング調査や、フィールド調査を行った。主要な作業としては、西ビザヤ地方パナイ島にて、2011 年来日の元農業実習生でイロイロ州周辺出身者 13 名に対する現状の生活や今後の海外就労予定に関する聞き取り調査を実施した。同時に、対象者が多かった同州レオン地区の農業を中心とした生業や出稼ぎ労働のタイミング、乾期の水利状況など経済状態についての予備調査も行った。これらのフィールド調査は、今回の渡航の目的の一つであったので、概ね順調に進んだことは幸いであった。

また、上述の農民たちが技能実習生として海外就労を果たす際のエージェントである海外雇用派遣会社(ケソン市)で聞き取り及び資料調査を実施した。過去10年の出身地別等の派遣者データを得たほか、ヒアリングでリクルートの動向を探った。全体的な輩出地の傾向が把握できたため、研究上、非常に有意義であった。また、同エージェントによる技能実習生送出の最大輩出地であるアブラ州において、3年間滞日の農業技能実習生への聞き取り調査を母村で実施した。派遣プロセスのキーパーソンであるフィリピン人女性の母村でもあるこの村では、典型的なチェーンマイグレーションが生じていたことが確認できた。

さらに、ヌエバエジハ州に位置する、2015年来日予定の農業技能実習生の準備施設において、約10名にインタビューを実施した。ここでは、元実習生が帰国後日本語教師としてエージェントで多数働いていたため、彼らのキャリアについても聞き取りを実施した。さらに同地において、2015年度の実習生に対する高冷地ハクサイ、レタスの栽培方法の講義をおこなった。これは上記データの入手と引き換えに送り出し機関から依頼されたものであったが、結果として今後のインフォーマントとの関係形成につながったため、恵まれた機会であった。

Yuya IIDA, "Cultivation of Napa Cabbages and Lettuces in Central Highland in Japan", Center for Applied Practical Skills, Nueva Ecija, Philippines. March 7th, 2015.

このほか、この先の研究の展開を見据えて、先に述べたパナイ島イロイロ州の東隣に位置する西ネグロス州シライ市で製糖工場関係者やサトウキビ収穫労働者と関係づくりを行った。

以上のように、フィールド調査によって得た収穫は大きく、また多岐にわたる。これらの成果として、整理して議論をまとめたのち、アジア文化センターの紀要に投稿を予定している。また、今年7月のICAS9(第9回アジア研究国際会議、アデレード)でアジア農村、農民の一動向として報告出来ればと考えている。

最後ではあるが、派遣期間を通して満足に達成できなかった目的課題として語学を挙げたい。期間中、英語を多用するあまり、フィリピン語およびヒリガイノン語の習得が疎かになった。学術的な英語の運用能力は渡航前と比較して格段に上達したように思うが、フィールド調査で方々に出かけるあまり、フィリピン語や調査対象者の現地語であるヒリガイノン語については腰を据えて習熟する機会を逸してしまった。片言の日常会話の域をでないと今後の調査に障りがでてくるのは瞭然であるため、あらためて帰国後の課題としたい。